

Tokyo Tobihino Rotary Club

国際ロータリー第2750地区 多摩南グループ 東京飛火野ロータリークラブ



RI会長
イアン H.S. ライスリー

会長テーマ

親睦と友愛を礎として、
この日野の地域社会に奉仕・貢献して行こう

2017▶18 Weekly Report vol.30-27 別紙



会長 小高 俊明



幹事 河野 和正

ロータリー：
変化をもたらす

東京足立ロータリークラブ 吉田和敏様 卓話「ボクシングの御陰」

本日はお招きいただきましてありがとうございます。合同例会は初めてです。2つのクラブに話ができるのは感慨深いですし、本当に幸せなことです。レフリーのシャツは今は白です。僕は昔の青いシャツを気に入っていますので着きました。靴も選手と一緒にゴム製です。ベルトをすることが出来ません、金属類を身につけてリングには上がれないのです。眼鏡もダメです、いつもは使い捨てのコンタクトをしています。レフリーの資格が取れてもなかなか試合には出られない、リングの下のジャッジばかりでした。原因は結婚指輪でした。20キロ太りました。減量したのですが、指輪が抜けなくて、抜けてからレフリーが出来ます。それ以来指輪は外したままです。



飛火野RCと八王子東RCの方々は人情に厚い人たちだと思うので、昔話をします。

高校時代はなんとなく学校に行きたくないで両親は呼び出しをくらっていました。呼び出し第1号です。

1年生で野球を辞めてしまって、充実感のない高校生活を過ごしていました。もう一度運動部に入ろうと決めました、親父も始めはゴルフ部を勧められました。親父の言う何の役にも立たないボクシング部でした。

このままでは悔いが残ると一大決心をしたのが高校2年生の時でした。人と同じことをしていたらダメ、人が1やることを2やる。名選手を研究するどんなボクサーも長所を持っている、その長所を伸ばす事を考え、素質もセンスも無い、しかし、スタミナとパワーは有ったので、いっばい走る事を決意しました。10キロコース5キロコースと。夜、家に帰って朝と同じ10キロコースを走りました。1日30キロ走りました。

台風の日も決して休まなかった。親友とこの頃出會って、福岡県久留米市出身の浅黒い彼は褒め上手でした。

パンチを褒めてくれて、犬も褒めれば木に登る、彼のお蔭で自信ができました。試合当日はいつも、ステーキ弁当をお袋が持たせてくれ、これを食べたら負ける訳にはいかない。父の日の試合の時、優勝する息子を親父に見せたかったので、決勝まで進みました。百戦錬磨の相手で、こちらは血まみれでしたが、親父が観ている前では負ける訳にはいかなかった。そして優勝しました。親父も最高の笑顔で喜んでくれました。しかし、顎を骨折して2カ月針金をいれていました。その時に、バナナジュースを飲み続けていたので、今でもバナナジュースを飲むとその時の事を思い出します。

3年生で主将になり、親父との約束で、大学に入った時に4年間で卒業する、将来稼業を継ぐために簿記検定2級まで取れと言われ、4年生になったときに夜間簿記学校に通いました。「東大の早稲田君のKOパンチ」という位有名な強い選手と試合する事になりました。どうしても彼との試合がしたかったので簿記学校を休むために親父に判子をもらいに行ったら、きっと反対されるのかと思ったら、みた事もない判子をいつもとは違う引き出しから出してきて、「これは縁起の良い判子だぞ」と応援してくれました。早稲田君との決勝戦は最大の力を発揮して優勝しました。

大学を卒業して大きなグループ企業ファミレスで働くようになりま

した。たまに会う友達がプロにやれるよと褒めてくれ、ボクシングは僕のいい思い出として学生時代で終わっていましたが、少しづつ気持ちが動き、挑んでみたくなってきました。たった一度きりの人生ですから。プロボクサーになる事を決めました。身体を鍛えだしました、仕事始めに練習、仕事終わりに練習と努力して、しかし規則正しい生活のために親父から家に戻ってこいと言われ、ただ条件付きでした。25歳になるまでと。プロボクサーになるために定拳ジムに入りたいと決めていました。世界チャンピオンの大場政夫さんがいたジムで、チャンピオンを育て上げたのは、マネージャーで、ボクシング界で彼女の事を知らない人はいない、小柄な素敵なお人です。いつも明るく張りのある事で活気がありました。僕たち全員に「お姉さん」と呼ばれていた、23歳のそして、忘れられない6月4日プロデビュー戦が行われました。50人位の知り合いが駆けつけてくれた。両親も応援に来てくれて、恩師も。学生時代のように相手をノックアウトするはずでした。しかし、1分46秒でKO負けでした。意識がはっきりし、お姉さんに「すいませんでした」と伝えたら、お姉さんは一言だけ「今日はなかった事にしましょう」と。この一言でどんなに救われたか。

翌日ボクシング部の恩師に電話をもらい、「吉田君逆境にあった時に本当の人間性が分かる」と言われ大粒の涙を流していました。暫くはいつもの通りの生活でしたが、人間って弱い、時間が経てばたつほど暗い過去の悔いが残り頭から離れなくなってきた、そのうちダメ人間になってきた。朝走らなくなりスポーツバックを持って上野界隈を彷徨って、時にはお酒も飲んで、そんなある日の朝、お袋に大きな声で、「走らないのが、負けたままで悔しくないのか」と言われました。この一言で生まれ変わり、自分の出来る最大の努力をして、翌年2月4日プロ2戦目、24歳になっていました。試合は1ラウンド1分4秒で今度は相手をKOしました。この試合には誰も呼びませんでした。誰にも話していないのですが、家に帰ったら、お袋がニコニコして出迎えてくれ「お父ちゃん観に行っただよ」と言われ、学生時代に見た親父の最高の笑顔を見せていました。

3戦目から、いつもの学生時代の快闊な自分に戻っていました。「勝つから見に来い、試合の後みんなで飲み会だぞ」と友達を呼び、負けられない状況をつくり自分を誇らしく有言実行しました。10月10日東日本新人王準々決勝まで進んでいました。しかし、負けてしまった。3日後25歳になった。もし勝っていたら頑固な親父を説得して、ボクシングを続けていました。ボクシングを辞めて暫くして分かったことが有ります。あの朝、お袋が僕を叱らなかったら、ボクシングで得た自信や信念をボクシングで失わせてはいけないという親心でした。心の底から感謝しています。

JBCルールを守り、ベストを尽くして、悔いを残さないように、と選手に伝えていきます。

最後に大好きな、あいだみつおさんの詩をきいてください。「人の世の幸 不幸は 人と人が逢うことからはじまる よき出逢いを」ありがとうございました。